不倫の果てに ～自戒～

東 英一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不倫の果てに　～自戒～

【Ｎコード】
Ｎ４７８２Ｅ

【作者名】
東　英一郎

【あらすじ】
社会通念上認められない『不倫』。その行く末を自ら戒めた作品です。ずいぶん省略し、構成上少し色を付けてますが、実話です。こんな事もあるんだと思って頂ければ幸いです。

第1話

一緒になろう、と二人で決めて四年。関係に終止符が打たれた。

四年もかかった理由はただひとつ。自分が既婚者で彼女は独身であること。世の中では、これを『不倫』と呼ぶ。けれど、一度たりとも『不倫』だとは決して思わなかった。そんな俗っぽい言葉の関係だとは思っていなかった。

後ろめたさなんかなかった。心から彼女を大事だと思った。自分が守るべき人は、彼女をおいて他はなかった。

二人で笑い、二人で悩み、二人で考え、そして喧嘩もし、泣かせもした。

一緒にいるのが楽しい、というより一緒にいるのが自然で当たり前の関係だった。

欲とは関係なく、互いを確かめるように抱き合い、心も体もひとつだった。自分の立場がどうあれ、人間として、彼女なしの生活は考えられなかった。趣味や好き嫌いといった外面的な嗜好から、考え方や思想といった内面的なものまで、二人は一致した。これまで、こんなにピッタリする人間はいなかった。

よく、どう正当化しようが、不倫は男の勝手な都合だと言う。

待つだけの女性の立場からすると確かにそうなのかもしれない。

第三者に言わせても、結果論からしてもそうなのかもしれない。都合がよく居心地のよい女性を手離したくないだけなのかもしれない。

どう言おうが不倫は不倫であるに違いない。しかし、一緒にいるその瞬間瞬間、そんな事は考えもしないほど真剣だった。人生をリセットできれば、時間が戻れば、などと出来もしないことを本気で思った。

同じ会社の同じ部署。
一回り違う先輩と後輩。
一緒に仕事をしているうちに、というごくありふれたきっかけだった。
初めは確かに、互いにちょっと遊ぶ程度だったのかもしれない。
しかし、ぐんぐん惹かれていった。
一緒に仕事をし、昼は一緒に食事をし、帰りも一緒に会社を出た。
そして一緒に夜も食事をした。彼女の家まで一緒に帰ったのも数知れない。一日のほとんどが一緒だった。旅行にも行った。京都に行って野宮神社で願掛けもした。伊豆の恋人岬で一緒に鐘を鳴らした。子供みたいに七夕の短冊に願いを書いた。『必ず一緒になれますように』

ただできなかったのが、朝一緒に会社に行く事、休みの日に会う事。これが彼女にとってイヤだった。つまり、自分は自宅に帰り、休日は自宅にいることだ。夜、終電に間に合うように、彼女の家を出る。窓から笑顔で手を振って見送ってくれた。
「また明日ね、バイバイ」
曲がり角を曲がる最後まで、明かりのついた窓から見送ってくれた。暗い道でこちらの姿が見えるはずはないのに。その後、部屋に一人残され泣いていたのを知っていた。知っていて知らないふりもしていた。そしてまた次の日、一緒に過ごした。ズルいと言われるかもしれない。結局家庭が大事なのじゃないかと言われるかもしれない。

「一緒にいると、すごく安心するの…」
彼女がよく言った言葉。自分も全く同じだった。
「でも、離れているとすごく不安で不安でどうにかなっちゃいそうなの…」
滅多に面と向かって弱音を言わない彼女の、これもよく言った言葉。

自分はとにかくこの不安を無くすのに精一杯努力した。
「もうすぐ別れるから…」
常套文句を蕎麦屋の出前のように繰り返し、先延ばしするのが不倫であるが、自分はそうなるまいとしっかり実行した。そして彼女に被害が及ばないようにも。そのための自宅帰りだった。
「他に好きな女性ができたので」では公的には認められないし、家庭内でも自分だけならまだしも、彼女に迷惑がかかる可能性だってある。長期戦覚悟で別の理由で切り出した。

しかし、当然ながら拒否される。本当に長期戦になり、真実全てを彼女に話せない自分は、それこそ蕎麦屋の出前になってしまった。そうなると、彼女の不安もより増し、自分は何とかなだめるのに苦労した。結果的に彼女に嘘をつき、家庭でも嘘をつき、二重の嘘に精神的に辛くなった。
（もう、やめよう…）
何度もそう思った。しかし、どうしても一緒になるためには、自分がやるしかない。誰も手伝ってはくれない。自分はとにかく戦いに集中することにした。

そんなある時、彼女が異動になった。同じフロアに席はあるものの、一緒に仕事をすることはなくなった。それをきっかけに集中しようと、彼女との距離を少し置いた。毎日会っていた回数を徐々に減らし、休日に必ずかけていた電話もやめた。集中するためでありながら、嘘の会話をしなければならない苦痛から逃れたかったのかもしれない。

『忙しいの？今日は会える？』
彼女からの連絡も日が空くようになり、毎日きていたたわいもないメールから、切実な言葉になっていった。
『ごめん、今日は無理…』

打ちながら心が痛んだ。本当は会いたい。悲しむ顔が頭をよぎる。
『そっか。あんまり無理しちゃだめだよ。また今度でいいよ』本心でないことは明らかなだけに、不覚にもこみあげてきた。

第2話

彼女に家の事は言いたくなかった。それまで一言も言ったことはなかったし、まして、今起きてる本当の事なんか言いたくなかった。けれども、嘘もつきたくなかった。だったら会わなければいい。話さなければいい。きちっと決着つければいい。

「別れたよ。一緒になろう」とさえ言えればいい。それまでの我慢だ。そう考えた。結果的にこれが間違いだった。

毎日一緒に過ごしていたはずが、一緒に帰ることもなくなり、メールも電話もめっきり減った。リダイヤルと着信履歴からは彼女の名前が消え、メールの日付も同じページに2ヶ月分位あった。会うのも月に2〜3回程度、それも昼の時間に。

「…昨日ね、ウチの部長、遅刻したんだよ」

「ふーん、そうなんだ。…なんか最近涼しくなったよな」

「……そうだね」

交わす会話もぎこちなくなり、自分達の仕事の不満やグチを言うだけで、互いに差し障りのない内容しか口に出なくなった。

ポツッと話し、ポツッと答える。

空気の抜けたボールでドリブルをしている、そんな感じだった。本当に聞きたい事を聞き出せない、本当に言いたい事を言い出せない。お互い、聞いたら言ったら、終わってしまうのではないかという不安が、心の中を占めていたのであろう。そして、自分がもがいてるうちに彼女がどんどん離れていく、そんな気もした。

その間自分は、然るべきところに相談し、何とか早く解決しようとした。その場では嘘をつけず、別れたい本当の理由を告げた。

「よくあるケースです。でも、厄介ですよ」

別に驚きもせず、淡々と言われた。

「あなたに原因があるわけですし、よほどのことがない限りまず無理ですね。できたとしても時間がかかるのが通例です。話し合われるのが一番かとおもうのですがねぇ」
相談に来たはずが、にべもない答えだった。話し合おうにも、聞く耳持たない相手にどうすればいいのか、それを教えて欲しいから来たのに。

「なぁ、話聞けよ。このままじゃどうしよもないだろ？」
「……」
初めは突然の事に半狂乱した連れも、次第に、怒るでも悲しむでもなく全くの無表情で、聞いているのかいないのかすら解らなくなった。
「いいか、ちゃんと考えようよ。恐らくこうなった以上、もう無理だよ。黙ってないでさ」
何とか穏便に事を図ろうと、それでも優しく言ったつもりだった。
「…なによ。…なによ。なによよなによよっ」
突然、唸るようなヒステリックな声をあげ、テーブルの上にあったグラスを投げつけてきた。
「人のせいにしてなによっ。こうなったのはアンタのせいでしょっ。ふざけないでよっ」
凄い形相で自分をにらみつけながら、そのまま自室にこもった。嗚咽が聞こえてくる。
確かにそうだ。その通りだ。全部自分のせいだ。何も言い返すことができず、大きなため息をつき、自分への怒りを堪え、唇をかみしめながら粉々になったグラスを片付けた。何も進まず時間ばかりが経っていく。

三度一緒に過ごしたクリスマス。
最後の年は、会うどころか電話もメールもとうとう互いになかった。いくら何でもクリスマスぐらいは、とも思ったが、そういう時こそ

尚更変になりたくないという気持ちが強く、携帯を開いては閉じを繰り返し、無意味に画面を見つめていた。もしかしたら彼女から連絡がくるのではないか、自分から連絡した方がいいのではないか、葛藤が心を苦しめた。

（え？なに？）

（あげる。欲しがってたやつ）

三度目のクリスマス、そっと買っておいた欲しがってたネックレスを渡すと、怪訝そうな顔で手にした包みを見つめた。

（…プレゼントいらないから。…毎年こうやって会えればいいから。ね？）

首を小さく横に振り、包みも開けず、少し微笑んだ顔に涙でいっぱいになった一生懸命な目が忘れられない。けれど、想いは二度と果たされなかった。

年末、出社最後の日、退社して本屋で立ち読みしていると、久しぶりに彼女からのメールがきた。

『会える？』

たった四文字。文字の少なさが空白期間の多さと反比例し、また、会おうとする強い意思表示の表れでもあった。

『まだ、仕事してる』

嘘を返した。

『どんなに遅くなってもいいから』

『多分無理。本当に遅くなりそう』

打ってる自分が嫌になった。

今度は電話がかかってきた。でなかった。伝言が残された。

（ねぇ、来年になっちゃうよ。今年、もう会えないんだよ。そんなのイヤだよ）

泣いていた。

渋谷。
混んでるしうるさいから嫌だ、と言う彼女のため、あまり一緒に行かなかった場所。そこでなぜか会う事にした。どこにも行かず、駅前の歩道橋下で会った。
すでに彼女の目は真っ赤だった。自分は何も言わず立っていた。
「ねぇ、もうこんなのイヤだ。ツラいんだよ。何もできないんだよ。毎日毎日苦しくて、私はどうすればいいの？」
彼女の声が、周囲の人混みの興味本位の視線を誘う。
「ねぇ、なんか言ってよ。黙ってたってわからないじゃない」
自分が家で、連れに言ってた言葉そのままだ。
「…もう少しだから」
「いっつも、もう少しもう少しって、…いつまで、…待たなきゃなんないの？…ずうっとこのままなの？」
涙がどんどんこみ上げ、鼻をすすりながら叫んでいる。自分はそれ以上答えられなかった。
「本当にもう少しだから…」
「信じたい。けど信じられないよ。…ねぇ、信じさせてよ。安心させてよ。お願いだから。ねぇ、ってば」
無表情にただ黙ってるだけの自分の胸を拳で叩くと、彼女は道に座り込んで泣いた。彼女と家との二重の苦しみに、自分もおかしくなりそうだった。
「…正月の間でなんとかするから。必ず一緒になれるから」
何の根拠もない空手形を切り、彼女を抱き起こした。
「…待ってる。もう三年待ったんだもん。あとちょっとなら待ってる」

明日から実家に戻るという彼女を改札まで見送った。
「また、来年会おうな」
「うん」
戻った笑顔で手を振りながら、彼女は改札の人混みに紛れて見えな

くなった。
こんなに辛く虚しく悲しい日はなかった。

第3話

（また、来年会おうな）と言ったきり、年末年始の休みが明けてからも連絡をとらなかった。約束を果たせないまま会ったのでは、また同じ事の繰り返しになる。彼女の独りになる不安も解っていた。しかし、みじめな思いをさせたくなかったし、したくもなかった、という思いの方が強かった。そして彼女からも連絡はこなかった。家では、とにかく諭し、説得し、もう戻れないことを何度も言い続けた。一方的だったのかもしれないが、もう方法はそれしかなかった。三月の彼女の誕生日も何もせず、四月の自分の誕生日は何もなく、オフィスでもフロアが違う階になり、顔も見ない、声も聞かない日が、年末以来四カ月を超えてしまった。もう、泣き言も恨み言もなく、関係が自然消滅したかのようだった。

そんなある晩、自宅に戻ると、一枚の紙がテーブルの上に置かれていた。いつでも書けるようにと、役所からもらってきていた届出用紙。連れのサインが記されていた。そして連れはいなくなっていた。何事かと思い、携帯に電話してみたが、只今電話に出れませんのメッセージ。しばらくすると、メールが届いた。

『実家にいます。疲れました。あとは自分で処理して下さい。返信しないで下さい』

喜びや驚きなんか一切なく、ただ呆然とした。拍子抜けした。いざサインされてみると、しかも唐突だったので、どうすべきなものなのか、ただ見つめていた。戦いはようやく終わった。

四月の終わり、彼女にメールした。会いたい、と言いたいだけなのに、何て書こうか悩んだ。結局事務的になってしまった。

『今日帰れますか？』

『少し遅くなりますが、それでよければ』

事務的に返ってきた。
１０分ぐらい遅れ、待ち合わせに彼女が現れた。全然変わってない様子に安心した。
「腹へったか？」
久しぶりのくせに、つい以前と同じ調子で聞いてしまった。
「食べてきたから、コーヒーでいい」
固い表情に固い口調。手をつないで歩こうと、手を取った。
「やだ」
手を振りほどいた。
「ごめん」
謝ると、近くのコーヒーショップまで先導する形で前を歩いた。注文を終え、しばらくタバコを吸ったまま何も言わず彼女を見ていた。何て言おうか考えてはいたが、こうして目の前にすると、何から何を言えばいいのか、迷ってしまう。
「で、何？」
唐突に切り出したかと思うと、彼女は一気にまくし立てた。
「私ね、今仕事楽しいんだ。自分で色々やれるんだよ。仕事が生きがいって感じかな。夜も勉強しに行ってるしね。もう泣かなくなったし、寂しいとも思わないんだ。だからもう、前みたいになりたくない」
黙って聞いていた。
「…何だったんだろう？三年も。四年？辛かったよねぇ。耐えたよねぇ。何で一緒にいたんだろ？楽しかったんだろうね、その時は。よくやれたと思って。でも、嫌だ。絶対にあんなの嫌だ。思い出すのも嫌だ。…だからもう会わないよ」
涙を流していた。
「…そうか。仕事楽しいか。良かったな」
「…」
少し微笑んで首を傾けた。

「じゃ、もう一人で歩いていけるな？元に戻ろう、なんてない訳だ？」
「…」
何も言わず微笑む。イエスと言ってるようなものだ。
「そっか…」
伝えることができない。
「…ね、何しに来たわけ？何か言いたいんじゃないの？どうして何も言わないの？どうして何もしてくれないの？」
悲痛な口調になっていた。
「嘘でもよかった。嘘じゃないの解ってたから、何でもいいから言って欲しかった。ずっと待ってたのに…。どうしてなのよ？答えてよ」
どうすべきか本当に迷った。身を引くのがいいのか、一緒になろうと言うのがいいのか、どちらが彼女にとっていいのか。
そして―。

「これ」
鞄から両者のサイン済みの紙を出した。
「何？」
「ちゃんと言えるようになった。遅くなったけど」
彼女はしばらく紙を眺めると、黙ったまま紙を返してきた。窓の外を見ながら泣いていた。
「今返事はいらない。しばらく考えて欲しい。もう本当に嫌なら今言って」
「…ずるいよ。いきなりこんなの。どうして？嫌だって言ったらどうすんの？破いて捨てるわけ？お願いだから、ちゃんと言ってよ」
一呼吸し、タバコの火を灰皿に押し付け言った。
「…一緒になろ？」
彼女も一呼吸した。
「考えさせて。…こっちから連絡するから」

最終話

ゴールデンウイークの間、何もなかった。再び仕事が始まる。来週は、大阪に出張だ。難しい仕事のため、あまり気にする暇がないほど準備に忙殺された。
月曜から金曜まで丸々一週間滞在の大阪出張。
初日月曜の夜、彼女からメールがきていた。
『出張なんだってね。お疲れ様。返事、言うのイヤだから、ロッカーに入れておきました。戻ってきたら見て下さい』
金曜、戻ったらすぐ見に行こう、そう思って一週間仕事に集中した。特に返事はしなかった。
トラブル続きの仕事で、遅々として予定通り進まない。徹夜が続き、金曜には終わらなかった。結局帰ってきたのは日曜の最終の新幹線。疲れ果ててすぐに帰って寝てしまった。

翌月曜、会社に行くなりロッカーを開けてみた。何の変哲もない会社の封筒が一通入っていた。空いていた会議室に急いで入り、ゆっくり封を開ける。四つ折りになった紙が一枚出てきた。開いてみる。これも何の変哲もないレポート用紙。そして見覚えのあるこじんまりとした、けど丁寧な文字が目に飛び込んできた。
『今度のお休み、二人で一緒に部屋探さなきゃね。一番やりたかったことなの　名前』

しばらく何度も読み返した。意味を理解するのに時間がかかった。
（この部屋ね、とりあえずなの。早く一緒になるまでの我慢なの。だから何も置かないし、何も買わない。殺風景でしょ？）
ある時彼女は突然引っ越した。お世辞にも女性の一人暮らしに向いているとは言えず、夏暑く冬寒く、近隣の音なんかよく聞こえる部屋だった。初めて行った時、彼女はちょっと自慢げにケラケラ笑い

ながらそう言った。自分は苦笑いした。しかし、とりあえずのはずが、自分のせいで更新するまで住むはめになっていた。

そして、会議室を出ると、彼女の席があるフロアへと急いだ。喜びよりも、とにかく急いで会いたかった。顔を見たかった。

席に彼女はいなかった。席をはずしてるんだろうと思った。その代わり、きちんと整理された机の真ん中に、白い百合の花が花瓶に飾られていた。

（花…？）

少しうろうろして戻ってきても、まだ彼女は席にいない。近くにいた知ってる女子社員に聞いてみた。

「…さん、いる？席はずし？」

「……？」

怪訝そうにかつ沈んだ表情で自分を見たまま何も言わなかった。

「どしたの？」

「…知らないんですか？」

「何を？」

「先週のこと」

「先週？…あぁ、大阪いたから。ずっと」

「…さん、もういないんですよ」

最後の方は泣き出していた。

「…いない？…って、どういうこと？」

「昨日、……オソウシキ…だったん…ですよ」

（オソウシキ？…って何？え？お葬式？誰の？）

「誰か亡くなられたの？」

女性は泣いていた。泣いて俯いたまま彼女の机を指差した。

（…ねぇ？、私がおばあちゃんになってね、先に死んだらどうする？泣く？それとも喜ぶ？）

笑いながらイタズラ顔で聞いてきたことがあった。
（ばぁか。先に死ぬのはこっちだよ。女の方が長生きなんだぜ。そんなことあり得るワケないだろ？）
軽くゲンコツで頭を撫でた。
（そうだよね…。あなたが８０で死んだら私は６８。そのあと２０年くらいまた独りぼっちなんだよね…。一緒なのってあと４０年くらいしかないんだよね。あっという間だよね、きっと）
真顔で言った。
その彼女が、先に天に帰した。

「…火曜日、帰宅途中に、はねられたんです。トラックに。…どうしようもなかったらしくって…」女性が続けた。
メールをもらった次の日だ。二人の関係上、部署が違う以上、当たり前だが自分に連絡はこなかった。そんな時、自分は何も知らず大阪で働いていたのだ。最期に何を見たのだろうか？何を聞いたのだろうか？何を言ったのだろうか？何を思ったのだろうか？

その直後、どうしたのかは覚えてない。とりあえず上司に休むと言って会社を出た。そして彼女のアパートに向かった。
（寝坊だろ？どうせ。起こしにいかなきゃ）
チャイムを鳴らした。何の反応もない。一度も使ったことのなかった合い鍵を取り出し、鍵を開けた。手が震えていた。
「おはよ…」
けれど、何の返事もない。いつもの匂い。いつもの音。変わらぬ殺風景。洗い置きの食器もそのまま。ベッドの布団も畳まれたまま。そのままのものは全て何もかもがそのままだった。
布団を触る。温もりはなく冷たかった。殺風景だからと買った小さな観葉植物が枯れ始めていた。彼女の生（セイ）を感じるものは何もなかった。そのまま一日中彼女の家にいた。彼女の帰りを待っていた。
（ただいまー）と帰って来るはずだった。そう思うのが当たり前だ

った。必然だった。いつも通り終電に間に合うまで部屋にいた。彼女はついに帰ってこなかった。玄関を出る。初めて鍵を自分で閉めた。ガチャッ。静かな夜に響き渡る。郵便受けが目に入った。一週間分がそのままだ。帰り道、振り返って彼女の部屋の窓を見た。

（また明日ね。バイバイ）

と笑顔で見送ってくれてる気がした。姿と声が目と耳の奥で甦った。明かりがつかない暗い窓をしばらく見つめ、最後の曲がり角を曲がった。

了

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4782e/

不倫の果てに ～自戒～

2010年12月11日14時57分発行